

伊藤利之 監修 小池純子, 半澤直美, 高橋秀寿, 橋本圭司 編
こどものリハビリテーション医学 (第3版)—発達支援と療育
安保雅博 (東京慈恵会医科大学リハビリテーション医学)

日進月歩で成長を続ける医療水準を背景に、少子高齢化が進んでいます。このことは、要するに「障害を持った人が増える」ということになります。しかもこの世の中、今後さらに情報化社会が進み、価値観の相違や権利意識、個別化、自己主張はより強くなるでしょう。また、必要な時期に必要なサービスを受けられる環境を求められるでしょう。

例えば、おとなの場合、地域包括ケアシステムを構築できる資質と環境があり、高度急性期医療や急性期医療、包括病棟、回復期リハビリテーション後の在宅施設、サービスを周辺に整備することによりチームケアや情報の共有が可能となり、住み慣れた地域においてノンストップで最期まで安心して任せることが可能になるところに、全てが集約されていくことになるでしょう。まさに、これからは医療と介護がしっかりと手を取り1人の人を最期までサポートできる体制づくりが必須となるでしょう。

この本の対象になる「こども」の構成も時代の流れで大きく変わってきています。私が病院で拝見する「こども」は、近年、肢体不自由児が減少し、その代わりハイリスクのこどもや重複障害を持つこどもが増加していること、特に精神系発達障害を持つこどもが増加していることを強く感じます。医療関係者の方々も同じように感じられる人が多いのではないのでしょうか。このようなこともあって、この『こ

どものリハビリテーション医学 第3版』は、第2版に比べ、ページ数を大幅に削減しながら、カラーを多く使い、多くの項目をコンパクトにまとめています。しかも、こどもの対象構造の変化を加味し、DSM-5を踏まえ、第4章「精神発達の障害」の章の割合を増やし充実を図っている特色がみられます。

「こども」を診察するうえで重要なことは、通常の身体的診察や精神運動発達評価に基づき、一般的な治療やリハビリテーション治療を行うことによって、運動機能や精神機能の改善を図ることをするのは言うまでもありませんが、発達段階に応じての日常生活や社会参加状況を含めた包括的な評価を行うことで、社会参加の可能な環境を整備することも当然しなければなりません。また、もちろんそこには福祉制度に関する幅広い柔軟な知識も必要になってきます。

まさに本書は、この辺りを幅広く理解しやすいように配慮している教科書といえると思います。よって、こどものリハビリテーションにかかわる多くの領域の医師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、看護師、社会福祉士など、関連する多職種の方々にとって、とても有意義なものになることは間違い無いと感じます。

(B5判 頁416 2017年 定価: 本体9,000円+税
[ISBN978-4-260-03217-9] 医学書院刊)